

Land of the Rising Signs

Sign painting's resurgence has reached Japan, and Peter Liedberg has been there to witness it first-hand, including his 2019 Letterheads meet, Big in Japan.

日本に7年間住んでいるスウェーデン人として、私は幸運にも、日本でサインペインティングへの関心が高まっているのを目の当たりにしてきました。日本でこの仕事を始めるのは簡単なことではありませんが、現在多くのペインターが筆を使って生計を立てています。

Looking Back

日本における看板・看板塗装の歴史は長く、830年頃の書物には「市場で商売をするときは、看板を立てて商品を見せること」と書かれています。これは、さまざまな種類の商品が並んでいる市場で、商人が差別化を図るためのものでした。

西洋の看板の歴史と同じように、初期の看板は絵が中心でした。例えば、靴下の形をした看板は足袋を売る店、櫛を形どった看板は櫛屋である事を知らせるものでした。国民の識字率が高まるにつれ、木や布などの看板に文字が使われるようになり、産業革命の進展とともに看板に使う他の素材も普及しました。

現在でも、料亭の提灯や、大相撲での番付表、墓標の木簡など、伝統的な手描きの看板は残っています。

Contemporary Influences

2015年に来日した当初は、筆を使った西洋風のレタリングを実施している人は1人しか知りませんでした。その後、徐々に世界中のサインペインターと繋がり、2019年に開催されたTokyo Letterheads では友人達と共に彼らと呼び集めました。(イベントの様子は bl.ag/tokyo をご覧ください。)

Letterheadsは、日本でサインペインティングをより多くの人に紹介するのに役立ったと思いますが、日本ではまだ新しい、あるいは比較的最近ペイントされたと思われる手描きのサインを見つけることは稀です。この種の仕事をしている人は、バイクやカスタムカルチャーのシーンから来ることが多く、エド・ビッグダディ・ロスやフォン・ダッチなどのアーティストが大きな影響力を持っています。1989年からムーンアイズのピンストライパーとして活躍するヒロ・ワイルドマン・イシイもその一人です。(ムーンアイズは、1ショットペイントやマックブラシなどのスペシャリストマテリアルを輸入・供給する日本のリーディングカンパニーです。)

Taking Flight

アメリカで活躍する注目のサインペインターが2人います。Kenji Nakayama さん (@kngee) は2004年にボストンに移り、自分のスタジオであるNeed Signs? Will Paint! (@needsignswillpaint) で働く傍ら、プテラ美術学校(現在は閉校している)で学んでいました。また彼は、自らのサインペインティングの練習に基づいた作品を定期的に展示しています。

2人目は Modern Twist Signs (@moderntwistsigns) の名でペイントをしている東京の Shinya Nakahara さんです。彼は2015年に『サインペインターズ』のデモン・スタイヤーを見て、初めて滞在したサンフランシスコのニューボヘミアサインズで仕事をするために戻ってきました。その映画がきっかけで、それまでグラフィックデザイナーとして活動していた彼はサインペインティングを始めることになったのです。

The Future

日本ではハンドペイントの市場やそのシーンはまだ少ないですが、着実に成長していると思います。大きな課題は日本語でそれらの情報にアクセスすることですが、これは私が毎月開催しているワークショップを通して解決しようと努めています。未来に対しては楽観的ですが、その変革には時間がかかると思います。幸運なことに私が話をするペインターも同じ考えで彼らも、彼らの仕事を通して永続的な遺産を作ることに尽力しています。そのうちのいくつかをご紹介します。

Written by Peter Liedberg,
Letterboy / @letter_boy
Tokyo Sign Co. / @tokyosignco

Land of the Rising Signs

Sign painting's resurgence has reached Japan, and Peter Liedberg has been there to witness it first-hand, including his 2019 Letterheads meet, Big in Japan.

日本に7年間住んでいるスウェーデン人として、私は幸運にも、日本でサインペインティングへの関心が高まっているのを目の当たりにしてきました。日本でこの仕事を始めるのは簡単なことではありませんが、現在多くのペインターが筆を使って生計を立てています。

Looking Back

日本における看板・看板塗装の歴史は長く、830年頃の書物には「市場で商売をするときは、看板を立てて商品を見せること」と書かれています。これは、さまざまな種類の商品が並んでいる市場で、商人が差別化を図るためのものでした。

西洋の看板の歴史と同じように、初期の看板は絵が中心でした。例えば、靴下の形をした看板は足袋を売る店、櫛を形どった看板は櫛屋である事を知らせるものでした。国民の識字率が高まるにつれ、木や布などの看板に文字が使われるようになり、産業革命の進展とともに看板に使う他の素材も普及しました。

現在でも、料亭の提灯や、大相撲での番付表、墓標の木簡など、伝統的な手描きの看板は残っています。

Contemporary Influences

2015年に来日した当初は、筆を使った西洋風のレタリングを実施している人は1人しか知りませんでした。その後、徐々に世界中のサインペインターと繋がり、2019年に開催されたTokyo Letterheads では友人達と共に彼らと呼び集めました。(イベントの様子は bl.ag/tokyo をご覧ください。)

Letterheadsは、日本でサインペインティングをより多くの人に紹介するのに役立ったと思いますが、日本ではまだ新しい、あるいは比較的最近ペイントされたと思われる手描きのサインを見つけることは稀です。この種の仕事をしている人は、バイクやカスタムカルチャーのシーンから来ることが多く、エド・ビッグダディ・ロスやフォン・ダッチなどのアーティストが大きな影響力を持っています。1989年からムーンアイズのピンストライパーとして活躍するヒロ・ワイルドマン・イシイもその一人です。(ムーンアイズは、1ショットペイントやマックブラシなどのスペシャリストマテリアルを輸入・供給する日本のリーディングカンパニーです。)

Taking Flight

アメリカで活躍する注目のサインペインターが2人います。Kenji Nakayama さん (@kngee) は2004年にボストンに移り、自分のスタジオであるNeed Signs? Will Paint! (@needsignswillpaint) で働く傍ら、プテラ美術学校(現在は閉校している)で学んでいました。また彼は、自らのサインペインティングの練習に基づいた作品を定期的に展示しています。

2人目は Modern Twist Signs (@moderntwistsigns) の名でペイントをしている東京の Shinya Nakahara さんです。彼は2015年に『サインペインターズ』のデモン・スタイヤーを見て、初めて滞在したサンフランシスコのニューボヘミアサインズで仕事をするために戻ってきました。その映画がきっかけで、それまでグラフィックデザイナーとして活動していた彼はサインペインティングを始めることになったのです。

The Future

日本ではハンドペイントの市場やそのシーンはまだ少ないですが、着実に成長していると思います。大きな課題は日本語でそれらの情報にアクセスすることですが、これは私が毎月開催しているワークショップを通して解決しようと努めています。未来に対しては楽観的ですが、その変革には時間がかかると思います。幸運なことに私が話をするペインターも同じ考えで彼らも、彼らの仕事を通して永続的な遺産を作ることに尽力しています。そのうちのいくつかをご紹介します。

Written by Peter Liedberg,
Letterboy / @letter_boy
Tokyo Sign Co. / @tokyosignco



Big Signs

Masaru Sawada, 44, Osaka

もともとアメ車が好きで、その中でピンストライプに興味を持つようになりました。アメリカを訪れた際、手描きの看板の文化に衝撃を受けました。日本でももっとワクワクする看板を制作したいと思い、サインペインティング関連の勉強を始め、2000年からこの仕事を始めています。ガラスギルディングに使用する全てのツールはとても魅力的です。中でも好きな仕事はサイズの大きい仕事です。

@big_sign_2000



Hand Signpainters

Yoshihiro Tamaki, 34, Okinawa Prefecture

私が生まれ育った沖縄は日本列島の南にある小さな島で、古くからアメリカのカルチャーがミックスされたユニークな場所です。そのため他の地域よりもサインペインティングが身近に感じられる場所だと思います。

17歳の時に初めてレタリングやピンストライプの作品を目にし、そこから独学で練習を始めました。当時は

今に比べると情報も少なく、海外の本や雑誌などの資料がとても貴重でした。私にとって学びは今も尽きないものです。

自分の描いたサインがお店や街を彩る一部になっていると実感できると嬉しいです。日本のサインペインティングが一過性のブームではなく、カルチャーとして日本に定着することを望んでいます。

@hand_signpainters



Hopping Shower

Tetsuya Sato, 49, Yamagata Prefecture

2000年にサインペインティングの世界に入り、2003年から本格的に始めました。車のピンストライプやレタリング、手描きの看板を見て衝撃を受けたのが、この仕事を始めるきっかけでした。1ショットの塗料とマックブラシを使うのが好きです。大きな看板を描いた後は小さなものを作りたくなり、その逆もしかりです。今後若い人達にもこの仕事を知って貰って、サインペインター、ピンストライパーを志す人が増えたら嬉しいです。

@hopping_shower_signpaint



Nuts Art Works

Naoto Hinai, 48, Tokyo

1996年にエド・ビッグダディ・ロスやワイルドマンの作品から影響を受けてされてサインペインティングを始めました。オリンピックのような、一目で私がやったことをみんなに分かってもらえるような大きな仕事をやってみたいです。

@nutsartworks

Back and Forth Signs Co.

Tsubasa Hirai, 42, Kyoto

17歳の時にカスタムカルチャー、特にフォンダッチの作品に興味を持ち、25歳の時にスタジオを設立しました。それまでも仕事としてペイントはしていましたが、本格的に始めたのはその頃からです。文字とイラストのバランス、全体の構成が整っている仕事をするのが好きです。日本のサインペイントをただの流行ではなく、文化として定着させていきたいです。

またサインペイントだけでなく道具や塗料、材料の販売も SIGNS & GOODS! Co. で行っています。

@backandforthsignsco

@signsandgoods_co



Walk Signs

Hideyuki Okimoto, 40, Yokohama

バイクや車のレタリングの仕事をきっかけに、看板を書くようになりました。現在は家の塗装や、ロゴ・Tシャツのデザインも並行して行っています。技術は独学で失敗を重ねながら学んでいきました。看板としての役割を果たすことはもちろんですが、経年劣化により看板に味が出たり、アートの要素も持ち合わせているサインペインティングをたくさんの方に知ってもらいたいです。

@walk.signs



Wildman

Hiro 'Wildman' Ishii, 57, Yokohama

Mooneyesが地元横浜にオープンした時、私はショップに通い始め、シゲさんにピンストライプの筆を譲り受けたことが、この仕事を始めたきっかけです。その後1989年にMooneyesに入社し、入社後にアメリカ・ユタ州でエド・"ビッグダディ"・ロスの指導を受けました。看板屋時代から慣れ親しんでいて、ほぼどんな素材にも描ける、1Shot Paintが好きです。

30年前と比べると、今は道具も材料も手に入りやすくなっていますし、若いペインターの方も多いので今後いろいろなスタイルのペインターやアーティストが出て来ると思います。

@mooneyesjp



Unile Signs

Sada, 42, Tokyo

約9年前に「普段書く字が綺麗だからやってみたら」と、ボストンで活動するKenji Nakayamaから筆が送られてきたことがきっかけでサインペインティングを始めました。

サインペインティングは、例えばプロの料理人と素人で、完成品の見た目や味はもとより素材の扱い方から何まで異なって来るのと同じように、ただ単純に筆を使って描くのではなく、綺麗に仕上げるための筆の技術や文字や書体、道具に対する知識等も必要だと思っています。

@unilesigns

